

## 空間の存在論 : 「語りえぬもの」の地理学

著者	中島 弘二
雑誌名	大分大学教育学部研究紀要
巻	15
号	2
ページ	249-262
発行年	1993-10-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/9891">http://hdl.handle.net/2297/9891</a>

## 空間の存在論

—「語りえぬもの」の地理学—

中島 弘 二\*

**【要 旨】** 従来の地理学における「空間」の概念は、空間を物理的・客観的実在とする「空間物神論」と構成諸要素の空間的反映に過ぎないとする要素還元論との両極の間で様々に揺れ動いてきた。本稿では「空間」概念をめぐるこのような理論的動向を「理論・計量地理学」から近年の社会理論に至る諸研究の中に見出し、エマニュエル・レヴィナスの存在論を手がかりにして、それらを「空間の存在論」として再定位することを試みる。

**【キーワード】** 空間物神論 アーバニズム 構造化理論 存在論

### はじめに

一つの思考実験から始めてみたい。われわれの眼前に展開するこの世界から、それを構成する事物を一つ一つ取り除いていったとしよう。家も森も空も土地もすべてを取り去り、あらゆる存在者がことごとく無に帰したとしよう。そのとき最後に残る出来事としてのこの「無」をわれわれは何と理解したらよいのか。それは世界の基本的次元としての「空間」を意味するものなのだろうか。それとも現実世界そのものの消失を意味するものなのだろうか。あるいは闇を想起してみよう。輝くネオンや路傍の街灯、さらにはまたたく星や月明りに至るまですべての光が一つ一つ消えてゆき、あらゆる形態が消失する漆黒の闇が生まれる時、この暗闇は世界を覆いつくす不可視のヴェールを意味するものなのだろうか。それとも世界の全き消失を意味するものなのだろうか。

哲学者レヴィナスはこうした出来事としての「無」や「暗闇」をイリヤ *il y a* (ある) という言葉で書き留めている (Levinas, 1990, 1991)。「あらゆるものを想像のうでに掃いた後に残るのは、何かあるもの *quelque chose* ではなくて、イリヤ *il y a* という事実である」 (Levinas, 1991, pp.25-26)。結論を先取りして言えば、上記のような命題における出来事としての「無」や「暗闇」は、それ自体一つの「空間」でもなければ、世界そのものの消失を意味するものでもない。それは個々の存在者には決して還元されることのない、存在するという活動そのもの、すなわち「磁場」としての〈実存すること〉なのである。それゆえにそこでの存在者の「不在 *absence*」は、同時に〈実存すること〉という絶対に避けることのできない一つの「現前 *presence*」を含意しているのである。そして個々の存在者の出現は、この〈実存すること〉の「現前」を通して初めて可能となるのである。

平成5年5月6日受理

\* なかしま・こうじ, 大分大学教育学部地理学教室

このように存在者の「不在」としての〈実存すること〉の「現前」を実存の基礎に据えることは、われわれの地理学的考察にとって重要な手がかりを与えてくれると思われる。現実世界の構成を主体不在の絶対的・超越論的な「空間構造」に帰することなく、しかも空間形態の多様性を個々の存在者の諸特性にも還元することなく、社会と空間の弁証法的連関の様態を明らかにすること、それは上記のような〈実存すること〉に対する地理学的検討を通じて初めて可能となるのである。〈実存すること〉は、超越論的な近代理性の側にも、実在する物質的諸対象の側にも還元されることのない、両義的な事実性を孕んでいる。しかしてその両義性こそが人間存在の弁証法を可能とするものなのであり、またかつてダルデルDardelが人間存在の「地理性géographicité」と呼んだものである。「地理学は、その定立によって、認識と実存とのほざまで葛藤せざるをえない」というダルデル (Dardel, 1952, p.133) の言葉は、人間存在の弁証法の基礎に〈実存すること〉に対する地理学的検討を位置付けることを意味しているのである。

以下の考察は近年の英語圏の社会理論研究における「空間」の存在論的含意を明らかにすることを目的としている。取り上げられる諸理論は様々であり、必ずしも学説史的・一貫性に基づいた検討が行なわれるわけではない。しかしいずれの場合にも、上記のような認識と存在とのほざまで「空間」の意味をとらえるという問題機制を方法論的旋回基軸として考察を進めることとする。

## I 「空間」概念の再考－「科学」と「空間」－

人文地理学者による「空間」に関する近年の研究の到達点を、セイヤーSayerは次のように要約している。「空間はそれを構成する諸対象と諸過程との関連から初めて理解し得るものであり、そのことは空間の研究が社会理論に根ざさねばならないということを含意している」(Sayer, 1985, p.51)。しかしきわめて簡潔なこの命題が意味する内容において、個々の地理学者による「空間」概念の使用はきわめて大きな多様性の振幅を示している。セイヤーによれば、地理学において展開されてきた従来の議論は、若干のニュアンスの違いを含みながらも、基本的には以下のような対照的な二つの認識の極の間で揺れ動いてきた。一つは空間をそれ自体で内的法則性と客観性を有する独立した実在としてとらえるいわゆる「空間物神論」であり、もう一つは逆に空間は個別構成諸要素の諸関係の反映であり究極的にはそれらの構成諸要素に還元可能であるとする要素還元論である。そこで本章では前者に基づく空間概念の事例を1950年代後半から始まったいわゆる「計量革命」以降の「理論・計量地理学」に求め、次章では後者に基づく空間概念の事例をアーバンイズムをめぐるマルクス主義都市研究にそれぞれ求め、近年の地理学における空間概念の再検討を試みたい。

論理実証主義の科学哲学に基づき法則定立科学を模索する「理論・計量地理学」の提唱者たちは、科学的地理学の固有の対象を理論的な「空間」に求めた。伝統的な個性記述の地理学に対する批判を展開したシェーファー-Schaeferは、「地理学にとって重要であるのは空間的諸関係であり、それ以外ではない」と断言する。そこでは空間的配列の法則の解明こそが科学的地理学の課題であり、イデオロギーと政治行動のつながり、あるいは民衆の心理的特性とその経済的制度との間の合法的つながりなどは、地理学者には係りはないとされたのである (Schaefer, 1953)。同様のことはシェーファーの後継者とされるバンジBungeによってより明

示的にのべられている。「空間的諸問題をそれ自体*per se*として取り扱うわれわれ（地理学者）の能力は、他の系統的諸科学に対して大きな強みをわれわれに与えてくれる」（カッコ内は引用者、強調はBunge (1962, p.197) による）。そこでは地理学の「科学化」のための不可欠の要請として、理論的対象としての「空間」の導入が示唆されている<sup>1)</sup>。実際、こうした「空間」への志向を裏付けるように、1950年代初期にはほとんど地理学論文のタイトル中に現われることのなかったspatialという用語が、1960年代後半から1970年代前半にかけて英語圏の地理学雑誌に掲載された論文のタイトルにおいて爆発的に増加したことが報告されている (Gould, 1985; 杉浦, 1989a)。しかし地理学におけるこのような「空間」への志向の高まりとは裏腹に、「空間」概念は以下に示すような二重の矛盾をかかえていた。

### 1. 認識論的矛盾－「空間物神論」－<sup>2)</sup>

「空間」をそれ自体で法則を有する自立的な対象として措定してしまったこと、すなわち「空間物神論」である。「空間」とは言語によって構成された普遍的・抽象的な一般名詞であり、ものや自然それ自体ではない。それにもかかわらず「空間」は地理学的分析における「万物の尺度」として、すなわちそこであらゆる地理的現象が展開する幾何学的座標面として物象化されてしまうのである。このような空間概念の絶対性は、セイヤーが指摘するように、空間的諸関係が個々の実在の諸対象によって構成されながらも、それら諸対象の属性には還元しえない独立した特性を有するというところに起因している (Sayer, 1984, 1985)。例えば前・後・左・右や内部と外部、中心と周縁といった空間的諸関係は、それを構成する対象が何であるかにかかわらず成立し得るものである。換言すれば、空間的諸関係は諸対象において諸対象を通してのみ実存し得るにもかかわらず、現前の対象の種別性からは相対的に独立しているのである。そしてこうした空間的諸関係の相対的独立性が、空間の絶対概念に対して一種の「もっともらしさ」を付与しているのである。しかしそのことは空間的諸関係が諸対象とは別個に独立して実存し得ることを意味するものではない。ましてそれらは、絶対的に独立した空間的諸関係の特性がそれを構成する諸対象の存在様式を本質的に決定するということを意味するものでもない。つまりそれらは、諸現象に対してそれらを外部から決定づける本質として、すなわちそれらに対する外在的な原因として効力を及ぼすものではないのである。空間的諸関係は、それを構成する諸対象の結果においてのみ現前し、その結果の中に現前する空間的諸関係の効果によってのみ諸対象を規定するのである<sup>3)</sup>。それゆえ外在的に結果を決定する本質的原因として、すなわち絶対的に自立した空間それ自体*space per se*としては「不在」なのである<sup>4)</sup>。それゆえ「空間の物神化」とは、このような概念的構成物（純粹空間）と実在の諸対象との存在論的連関を認識論的に切断し、後者の結果の中に現前する構造的効果の因果的説明力を前者の「純粹空間」へと帰することによって可能となるのである (Sayer, 1984, p.133)。しかしそうした「空間物神論」は、科学的考察によってどれほど空間の純粹性と理論的抽象度を高めようとも、空間的諸関係とそれを構成する諸対象との存在論的連関を完全に解消することはできない。

### 2. 存在論的矛盾－「科学主義」－

地理学を専門分化した近代科学の一分派へと囲い込み、社会的現実との社会的関連性social relevancyを切断してしまったこと、すなわち地理学の「科学主義化」である。合衆国の地理学界における「理論・計量地理学」の台頭が、純粹に科学史的展開によるものであったのみな

らず、当時の合衆国の多様な社会的・政治的状況に対するアカデミズム地理学の対応の一つであったことは近年の地理学史研究が指摘するところである (ex. 杉浦, 1986, 1987, 1989a, b, 1991)。とりわけハーバード大学をはじめ名門大学における地理学科の閉鎖や、社会における地理学に対する学問的評価の低さ、地域科学や社会物理学をはじめとした他の社会諸科学による「領域侵犯」といった当時の地理学をとりまく状況は、地理学者に危機意識を呼び起こし、地理学固有の科学的対象—空間的法則性—の模索へと彼らを駆り立てていったのである (杉浦, 1986, 1989a, b)。「基礎科学としての地理学の独創性と力は、遠からず発達した諸科学の中で首位的立場を地理学のために確立するであろうことを、私は確信する」(傍点部引用者) というBunge (1962, p.197) の言葉は、上記のような危機意識に対する希望的観測だったと言える。しかしこのような地理学の「科学化」は、その純粹理論・客観科学への志向性とは裏腹に、きわめて政治的な社会的関連性をはらんだものであった。そのことは政府および民間機関による科学研究費調達システムへの地理学の参入とそのための計量分析の導入による地理学の「科学化」という事態に最も端的に示されている (杉浦, 1987)。地理学を空間の科学へと脱却させる試みは、同時に研究費の支給とそのみかえりとしての奉仕を媒介とする国家(軍)・産業・科学の体系的構造へと地理学を包摂する、学問の「体制化」につながるものでもあったのである (杉浦, 1987, p.338)。それゆえ「科学主義」とは、このような科学的言説と社会的現実との政治的連関を存在論的に切断し、科学的認識に絶対的な独立性と自立性を与えることによって、逆に専門分化した近代資本主義社会の社会的分業—とりわけ肉体労働と知的労働との分離—を固定化する一種のブルジョアイデオロギーに他ならないのである。

## II 「都市」と「空間」—「アーバニズム」をめぐる—

近年の地理学において「空間物神論」とそれに基づく空間の絶対概念に対する批判はすでにきわめて一般的なものとなっているが、それにもかかわらずそうした「空間物神論」の告発者自身の研究の中に、例えば「空間の政治経済学」のように、空間の諸効果をあたかもそれが一つのモノであるかのように言及するものがみられるとセイヤーは指摘している (Sayer, 1985, pp.53-54)。セイヤーによれば、抽象的社会理論は諸対象の必然的諸特性がそこに含まれる限りにおいてのみ空間の考察を必要としており、実際の空間諸形態についてはほとんど何一つ語っていないのである。例えば「資本は生産手段を持たない労働者と出会わねばならない」という命題は、労働市場の実際の空間形態については何も語っていない。そこでの空間の理論的含意は、構造的効果を生み出すいかなる諸対象も空間的広がりをも有しており針の頭の上で展開しているのではない、というものでしかない。このように抽象的社会理論の多くはその因果的説明力を、具体的な空間形態との偶有的諸関係にはなく、空間を構成する諸対象が有する諸特性との必然的諸関係に求めているのである。それゆえ例えば後述のギデنز (Giddens, 1984) が唱える「距離化distanciation」や「時間—空間のエッジtime-space edges」といった諸概念が有効な理論的・メタ理論的役割を持つとしても、それらは具体的な空間形態の諸効果に帰せられるべきものではないのである。

社会理論におけるこのような空間の要素還元論的な傾向とそれへの批判は、「アーバニズムurbanism」の性格規定をめぐる従来のマルクス主義都市研究においてみることができる。ハーヴェイHarveyはアーバニズムの定義に関して次のように問う、「アーバニズムは①それに内在

する変換諸法則と構成諸法則とを持つ独立した構造であるのか、それとも②（社会的生産諸関係のような）より広範な構造に組み込まれた一連の諸関係の表現であるのか」（Harvey, 1973, p.304）。このような二者択一において、ハーヴェイはルフェーブルLefebvreとの間に微妙なしかし決定的なニュアンスの違いを示している。多くの点で両者は共通の立脚点に立ちながらも、アーバンイズムと工業社会の相互規定関係において前者の後者に対する優越性を重視するルフェーブル（1974）に対して、ハーヴェイはたとえアーバンイズムがそれ自身の原動力を有する独立した構造であるとしてもその諸効果は工業社会の諸構造によって支配されていることを主張する（Harvey, 1973）。とりわけ「ルフェーブルとの意見の不一致の最も重要な源泉」とハーヴェイ自らが位置付けるものは、剰余価値の循環とアーバンイズムの関係についてである（Harvey, 1973, pp.312-313）。ここでハーヴェイはルフェーブルにならって剰余価値循環を2つの回路に区別している。第1の回路は工業活動から生じる直接的生産過程における価値循環の回路であり、第2の回路は所有権への投機や固定資本投下に基づく剰余価値の創出と取得の回路である。ルフェーブルは固定資本への投下を通じてアーバンイズムの創出に直接的に関与する第2の回路を重視し、過剰蓄積の傾向が拡大するにつれて第2の回路が第1の回路に取って代わることを指摘している（ルフェーブル, 1974, pp.198-199）。これに対してハーヴェイは産業資本主義に基づく第1の回路の方が支配的であることを強く主張している。ハーヴェイによれば、剰余価値循環はアーバンイズムの内的原動力に従うのではなく、何よりも工業社会に由来する諸条件によって規制されるのであり、アーバンイズムは逆にそれによって生み出されるものなのである<sup>9)</sup>。

このような近代資本主義社会におけるアーバンイズムの概念規定をめぐるハーヴェイとルフェーブルとの理論的不一致は、都市社会学者カステルCastellsとの間でさらに大きな差異となってあらわれている。周知のようにカステル（1984）は「都市的なもの」を集团的消費を媒介とする労働力再生産の空間的単位として定義している。カステルにとって都市とはいわば「社会の空間への投影」であり、都市空間は「社会が自己を明示する歴史的全体の具体的表現」とされたのである（カステル, 1984, p.105）。とりわけラディカルな社会変動の背後の原動力として階級闘争に代わって空間的・領域的闘争の重要性を強調するルフェーブルに対して、カステルは何よりも階級闘争の第一義的な優位性を強調した。それゆえ経済的下部構造に規定された単なる上部構造のレベルにとどまることなく社会的生産諸関係を改変しそれ自身一つの生産力となりうるもの（ルフェーブル, 1974, p.25）としてアーバンイズムを定義するルフェーブルは、ソジャ（Soja, 1989）によれば、ハーヴェイおよびカステルにとっていわば空間物神論に屈伏した「空間分離論者」に等しいものであった。

しかしながら、1970年代以降のマルクス主義的空間分析に多く見られるこのような形でのルフェーブルに対する理論的反動は、空間物神論の危険を回避しようとするあまりに近視眼的な努力であり、不必要に限定された空間諸関係の概念化のうえに築かれたものであったとソジャ（Soja, 1989, p.77）は指摘する。なぜなら例えば集团的消費を介しての労働力再生産の空間的単位として「都市的なもの」を階級構造の空間的反映とみなすことは、空間物神論を回避しようとする努力とは裏腹に、空間構造の基礎を生産と階級諸関係から切断してしまう誤りを犯すこととなるからである。そしてそのことは都市空間をその構成諸要素へと還元し、空間形態の偶有性とその相対的自立性の諸効果を見落とすことを意味しているのである（Sayer, 1985, pp.57-59）。

ソジャが指摘するように、組織された空間の構造はそれ自身の内在的な構成と変換の自立的

諸法則を有した独立した構造でもなければ、社会的生産諸関係に由来する階級構造の単なる空間的表現でもない。それは同時に社会的であり空間的でもある弁証法的に定義された一般的生産諸関係の構成要素を表わしているのである (Soja, 1989, p.78)。そしてそのことは、吉原 (1993) が指摘するように、かつてルフェーブルに批判的であったカステルやハーヴェイがともに最近の著作 (Harvey, 1989; Castells, 1989) において、ポストモダンの情報都市における「生活の質」や「ライフスタイル」の変化など新たな「空間の生産」を通じた資本主義的な「主体の生産」に言及することで、ルフェーブル (Lefebvre, 1991) の空間論に再接近していることにも表われているように思われる<sup>6)</sup>。

### Ⅲ 不在と現前—社会生活の時間—空間的構成—

#### 1. 事象の現前化 (presencing of matters)

前章までの議論に示されているように近年の社会理論において「空間」というタームによって含意されているところのものは、空間それ自体を独立した客観的実在にとらえる「空間物神論」でもなければ、個別構成諸要素の反映にとらえる素朴実体論的な要素還元論でもない。それは冒頭で述べたような「存在するという活動そのもの」である〈実存すること〉の事実性＝偶有性に他ならない。しかしこうした事実性＝偶有性は認識の側にも実体の側にも還元されることのない両義的なものであるがゆえに、それ自体を言語的に概念化することはきわめて困難なものである。そこで本章ではこの両義的な〈実存すること〉を直接的に言い当てるのではなく、個別の存在者 (諸対象) の「不在」と〈実存すること〉の「現前」が交錯する「事象の現前化」に焦点を当てることとする。

実はこのような問題設定は、すでにヘーゲルストランド (Hägerstrand, 1984) によってかつて別の形で提議されたものである。彼は永年にわたる地域政策とプランニングへの関与の中で、「いかにして現実世界は人々によって予測され、意図され、望まれたものとは別の結果を生じるに至るのか」という問題に直面してきた。彼はそこで現実世界に対する二つの異なるアプローチの様式を区別している。一つは分類学的アプローチとでも呼べるもので、生物を概念的に分類し、それらをその住み家habitatから取り除き、分類体系の中へと位置付けるものである。もう一つは包括的アプローチとでも呼べるもので、現実世界の一部分を有機体も非有機体もゴタ混ぜにしてあるがままに包括しようとするものである。言語は基本的に前者の分類学的アプローチの遂行に役立つものである。しかし言語やそれに基づく理性的思考とは異なり、われわれは実際に何事かを行なう時、上記のゴタ混ぜの現実世界の一部分に身体的に含まれざるをえない。それゆえわれわれは現実において自分自身をゴタ混ぜの環境から切り離すことが、概念的には可能であっても、現実にはできないのである。

以上のことから次のような問題設定が提議される。①言語に基づく理論やモデルにおいて個々の存在者はいかにして現実から切り離され (不在化され)、分類体系の中に位置付けられるのか、②現実世界において個々の存在者たちはいかにして他の存在者と身体的に重なりあう現実の恒常的なフローとして現前化するのか、そして③現実の社会状況は概念的分類を通じた存在者の「不在」と、相互に関連しあった身体的な「現前」との交錯のうえにどのようにして一つの「ジオラマdioramas」として現前化するのか。以上のようなヘーゲルストランドの問題設定は、社会学者ギデنزGiddensの構造化理論へと受け継がれ、重要な理論的深化を遂げるこ

ととなる。

## 2. 社会生活の時間－空間的構成

ギデنزはその難解な構造化理論の中で、主体－構造（主体－客体、主観主義－客観主義）の二元論を乗り越える試みとして「構造の二重性duality of structure」という概念を導入している（Giddens, 1984；ギデنز, 1989）。これは構造が行為を規制しつつ、行為の実践によって構造それ自体が変容するという、社会生活の本質的な再帰性recursivenessを意味するものである。そのことはまた、行為の自省的評価reflexive monitoring of actionに基づく主体の意図的行為が構造の再生産という意図せざる結果へと帰着するのはいかにしてか、という理論的な問いかけでもある。

こうした問いかけに対して、ギデنزは主体的行為を構造へと結び付けるチャンネルとして社会生活の時間－空間的構成time-space constitution of social lifeを強調している。そのための理論的装置としてギデنزは「社会統合social integration」と「システム統合system integration」という社会分化の二つのレベルを提示している。前者の「社会統合」は、行為の自省的評価に基づく行為者間の対面的相互行為によって構成される社会分化のレベルであり、後者の「システム統合」は集団間・集合体間の互酬的關係によって構成される社会分化のレベルである（ギデنز, 1989, pp.82-83）。このような社会分化の実現において不可欠のチャンネルとなるのが、社会統合・システム統合それぞれにとっての時間－空間的構成なのである（Giddens, 1984, pp.142-144）。

前者の社会統合のレベルでは行為者間の対面的相互行為は時間－空間において「共－在」co-presenceしている人々の間でのルーティン化された日常的行為によって構成されている。例えば分節社会であるような部族社会においては、村落共同体が圧倒的に重要な地域的単位となっており、そこでは日常的な出会いが時間－空間的に構成・再構成されている。こうした社会においては時間－空間的な「共－在」の諸関係がより強い影響力を持っているのである。

しかしこうした時間－空間的な「共－在」のもとでの社会諸関係は決して完全に独立したものではなく、常により広範な開かれた「間社会的システム」の中にもゆるやかに統合されているのである。例えば現代の情報化社会において、われわれは手紙や電話・ファックス等のコミュニケーション手段によって遠くに離れた人とも容易にコンタクトをとることができ、またそのことの上に現代の産業社会は形成・維持されている。そこではいわば時間－空間的に「不在」である人々との相互行為・コミュニケーションによって構成される「システム統合」のレベルで社会が実現されているのである。もちろんこうした「不在」のもとでの相互行為は、時間－空間的に離れた異なる社会の間を結ぶ船乗りや軍隊・商人・旅人・冒険家など「ノマディック」な人々から現代の海外商社員や貿易商人、国際航空や国際通信の担い手に至るまで、出会いと「共－在」の果てしない連鎖によって可能となってきたものである。その意味で、18世紀以降の社会統合のシステム統合への包摂の過程とは、相互行為・コミュニケーションチャンネルの絶え間ない時間－空間的な「距離化distanciation」の過程であったと言える。

ギデنزはこのような時間－空間的な「拡張」の典型的事例を階級分割社会<sup>7)</sup>の都市に見出している。都市はより広範な時間－空間的な距離化を通じて資源（とりわけ行政的資源）の集中化を確立した。階級分割社会における「地域化regionalization」は、常にこのような資源をめぐる都市と農村部との相互依存的で敵対的な結び付きのうえに形成されているのである



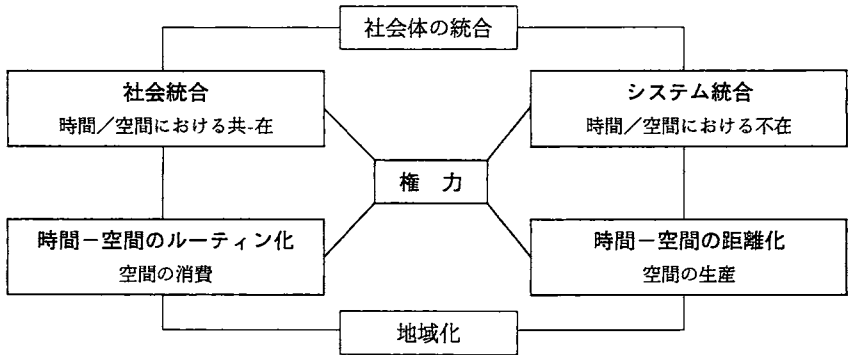


図 社会生活の時間-空間的構成  
Gregory(1989, p.188)より引用

(Giddens, 1984, p.143)。

「不在」と「共-在」の弁証法を柱とする以上のようなギデنزによる社会生活の時間-空間的構成の説明<sup>8)</sup>は、グレゴリーによって図のように示されている (Gregory, 1989, p.188)。グレゴリー自身はギデنزのこのような構造化理論に対して、社会生活の再生産における場所の意味や象徴的景観についての言及が欠落している点や、ハーヴェイがとりくんだような「空間の生産」の問題が取り上げられていない点について批判を加えている (Gregory, 1989, p.187)。実際、前述のセイヤーによるギデنزへの批判は、まさにギデنزの構造化理論が上記のような時間-空間の「距離化」や「ルーティン化」の具体的な形態と内容について何も語っておらず、グレゴリーが指摘するように、空間形成の秩序の問題が抽象的な空間パターンの問題へと理論化されてしまうことに対して向けられているのである。抽象的な構造概念(認識)と個別具体的な諸主体(実在)との二元論を克服するために、主観主義も客観主義もともにしりぞけつつ「構造化理論」の構築へと向かったギデنزは、その意図とは裏腹に構造化論の存在論的基礎付けにおいて客観的・抽象的な「空間」理論を導入してしまったと言えよう<sup>9)</sup>。しかしながら構造の二重性に示されるような社会生活の本質的な再帰性を「不在」と「共-在」の弁証法のもとに位置付けたことの理論的意義はきわめて大きい。なぜならそれは「空間」の問題を、空間の概念規定や空間認識の問題にとどまらせることなく、社会理論と存在論との接点として位置付けることを含意しているからである。

#### IV 「語りえぬもの」の存在論

ソジャはその著書『ポストモダンの地理学』の第5章：再主張-空間化された存在論へ向け-において、「空間性」<sup>10)</sup>に対する独自の存在論的検討を行なっている (Soja, 1989, pp.118-137)。ソジャはそこでプーランツァス (Poulantzas, 1978) の空間論<sup>11)</sup>を高く評価し、「彼もまた(自分と同様)ある種の社会-空間弁証法を発見したのだ」(括弧内は引用者)と賛意を惜しまない。とりわけプーランツァスが示した資本主義の「空間-時間的な母胎matrices

spatiales et temporelles」は、単に既存の生産諸関係に基づく機械的因果律が生み出した産物であるだけでなく同時にそうした生産諸関係の前提ともなっているという点において、それがあある「論理的先験性logical priority」を有するものである点をソジャは重視している。それは思考様式・表象様式であると同時に、社会生活の基本的な物質的枠組みと現実的基体を打ち立てるものなのである。このようにプーランツァスの主張の再検討は、ソジャによれば、社会生活の空間性の再理論化を促すだけでなく、同時によりメタ理論的なプロジェクト、すなわち空間性の適切な存在論的・認識論的位置付けを探究するものでもある。それは空間を社会的存在の基本的な参照枠として明らかにすることであり、資本主義の空間的実践の具体性だけでなく、近代の存在論および認識論の哲学的抽象化の再考をも必要とするものなのである (Soja, 1989, pp.119-120)。それゆえわれわれも再び存在論へと、あの困難なく実存することの存在論へと向かわねばならない。

冒頭で述べたように、レヴィナスは出来事としての「無」や「暗闇」をイリヤ il y a (ある) という言葉で書き留めている。〈雨が降る il pleut〉や〈暑い il fait chaud〉と同じように、名詞によっては表現しえず非人称構文によって表わされるような主語を持たない本質的に無名性のこの活動を、レヴィナスは実存者なき〈実存すること〉exister sans existantと呼ぶ。それは存在するもの(実存者)に決して繋ぎとめられることのない、存在するという活動そのもの、「磁場」としての〈存在すること〉なのである。それゆえにそこでの実存者の「不在」は、同時に〈実存すること〉の「現前」なのである。『何も…ない』というこの無は、純粋な虚無の無ではない。これやあれはもはやなく、『何か』はないのだ。だがこの偏き不在は、翻ってひとつの現前、絶対に避けることのできないひとつの現前なのである (Levinas, 1990, p.94)。それは本質的に無名性の名詞化しえない活動であり、言説以前の名付けえぬ出来事に他ならない。

以上のような本質的に無名性の〈実存すること〉に言及することは、しかし、その上に様々な存在者が定位される存在基盤としての「空間」を意味するものではない。そのような「空間」はすでに一つの何ものか、一つの存在者に他ならず、それゆえすでに名詞(実詞)のカテゴリーに含まれるものである。レヴィナスが明らかにしようとするのは、名詞化しえない無名性の〈実存すること〉の中に「空間」という名詞(実詞)の実存者が出現することの意義、すなわち「〈存在する〉という名付けえぬ動詞が実詞に変容するその出来事」としての「イポスターズ hypostase (実詞化, 位相転換)」(Levinas, 1991, pp.31-34 ; 1990, pp.107-165)の含意を明らかにすることである。それはまた、イリヤという非人称的な出来事の中から人称的な実存者が出現する過程を解明することであり、自己同一性に根ざした一者的な「主体」が出現する過程を解明することである。そこでは、存在者が〈存在する〉という動詞の主語となり、そのことによって存在をみずからの属辞とするのであり、〈私〉という存在者による実存の我有化が遂行されるのである (Levinas, 1990, pp.140-142)。

しかしここで重要なのは、柄谷 (1989, p.44) が指摘するように、「実存のこの実詞化が、他者によって命名されるということによって可能になる」ということである。主体の出現は決して独我論的に可能となるのではない。「あれ」や「それ」ではない他ならぬ「この」者として、すなわち他者との弁別的な差異によって指示対象と実詞との特権的な自己同一化が可能となるのである。そうした弁別的な差異とは、一般性と特殊性、あるいは類と個といった意味論的な差異には還元できない物質的な差異である。それは、主体の出現が究極的に他者と共有しえな

い単独の身体性を我有化することによって可能となるという意味において、物質性＝質料性 *matérialité* につきまといわれた差異である。それゆえ〈実存すること〉に対する実存者の支配は、弁証法的な逆転を含むものとなる。自己同一性の活動とは、匿名的な〈実存すること〉からの離脱であると同時に、物質的に差異付けられた他ならぬ自己、すなわち物質的身体を持った具体的な自己への回帰でもある<sup>13)</sup>。「実存者定立の代償は、実存者が自己から離脱し得ないという事実そのもののうちにある」(Levinas, 1991, p.36)。このように主体にとっての身体を、〈自我moi〉と〈自己soi〉とのあいだの關係の具体的な出来事としての物質性 (Levinas, 1991, p.37) ととらえることは、主体の自由、すなわち特權的な自己同一化にとっての根本的な背理を含んでいる。なぜなら物質性とは、「対象ではなく名ではない何ものか、名づけえず、詩によってしか現われえない何ものか」として、すなわち「〈ある〉という事実そのもの」として理解されるものなのである (Levinas, 1990, pp.91-92)<sup>13)</sup>。非人称的な〈ある〉を離脱して〈実存すること〉に対する支配者となった人称的主体＝実存者は、まさにそのことによって身体という物質性、すなわち〈ある〉という事実性につきまといわれることとなるのである。自己の存在の物質性と相対性を隠蔽して、観念的で絶対的な超越論的主体の形成へと向かう近代的主体は、その内に決して解消しえない存在論的矛盾を孕んでいるのである。そしてその点にこそ、われわれが「空間論」を論じる理論的プロブレマティクが横たわっている。

プーランツァスが指摘するように、近代資本主義社会は分割され細分化された個別具体的な場所への個々人の割り当てとそこでのルーティン化された日常的行為によって維持・再生産されている (例えば工場の生産ラインへの労働者の分割配置)。一方、世界的に張り巡らされた流通と通信の網の目は個々の場所の固定性を離脱し、距離の制約を克服することによって、自在に場所間を結び付けることを可能とし、資本と労働の世界的規模での「出会い」をひきおこした (例えば多国籍企業の海外進出による海外労働市場の開拓)。そして資本主義発展の歴史とは、前者の「社会統合」を後者の「システム統合」のもとへと包摂していく過程であり、それは新たな「空間の生産」を通じた新たな資本主義的「主体の生産」の過程でもあった。しかしこのような主体の生産過程 (= 実存者の出現) は、その実現を「空間の生産」というもう一つの実存者の出現へ依存しなければならない。そしてそうした連鎖的な依存關係は、上で見たように、ついに〈実存すること〉の物質的拘束性を離脱することができないのである。換言すれば、空間的・時間的な「不在」を通じたシステム統合は、「現前」に基づく社会統合を自己のもとへと包摂していきながらも、それから完全に離脱することはできないのである。そのことは多国籍企業の海外労働市場拡大 (= システム統合の拡大) の実現が結局は進出先での用地取得や工場建設、労働者獲得 (社会統合の成立) に大きく左右されざるをえないことにも示されている<sup>14)</sup>。

ソジャが指摘するように、資本主義のもとでの「空間の生産」は決してスムーズでも自動調節的なものでもなく、むしろ矛盾と危機の恒常的源泉を孕んでいるのである (Soja, 1989, pp. 128-129)。そしてそうした資本主義の危機とは上に示したような存在論的矛盾にその根をおろしているのである。

#### おわりに

絶対的な物理的空間のもとでの世界的規模におけるシステム統合の拡大は、地球上のあらゆる「場所」を商品世界の空間構造のもとへと包摂しつつある。それは経済的下部構造のレベル

にとどまることなく、社会生活のあらゆる局面を社会的-空間的分業体系のもとへと再編しつつある。第1章で述べたように、そこでは学問も例外ではない。専門分化した「分類学的」な知の体系は、「科学主義」という知的労働と肉体労働との分離を固定化する資本主義のイデオロギーに他ならないのである。

「空間」の存在論的含意を明らかにすること、それは近代主義的な知=権力に対する一貫した認識論的・存在論的批判であり、そのための地理学的認識の途を模索する試みである。それは地理学を制度化されたブルジョア科学の一分派へと閉じ込めることなく、自らをも批判の対象としうる開かれた認識へと解放することである。地理学も近代科学の一つとして誕生し、そして現在もそうである以上、その地点から語るいかなる言葉も近代的理性が有する限界を逃れることはできない。柄谷(1988, p.315)が言うように、われわれは「すでに《内部》に閉じこめられている」のである。近代という内部から自らがその一人であるところの近代的主体とその知に対する批判を展開するための理論的必然性が、そこでは明らかにされねばならない。レヴィナスは言う、「実存するものを理解するために、実存しないものに手がかりを求めることは、少しも哲学上の革命といったものになるわけではない」(Levinas, 1991, p.25)。日常的な「存在者」を離脱してひたすらに本来的な「存在」へと向かうハイデッガーとは逆に、非人称的な「実存」からありふれた「実存者」へと向かうレヴィナスは、禁欲的である。そして内部から批判を企てようとするわれわれの探究が基点とすべき地点は、ハイデッガーであるよりはレヴィナスである。

## 注

- 1) もっとも、シェーファーが示唆した静態的な「空間の科学としての地理学」が、動態的現象の解明を目指した1950年代当時のアメリカ計量地理学派の志向とは必ずしも同一ではなかったことが杉浦によって指摘されているが、認識論的に「空間」をめぐる両者の間に著しい相違があったとは思われない。
- 2) 本節は拙稿(中島, 1993)の一部を加筆・修正したものである
- 3) 空間的諸関係のこうした性質は、資本制生産様式に関してアルチュセール・バリバル(1974)が「構造的因果性」と呼んだものと同じである。例えば個々の労働生産物が「商品」として抽象的な「価値」を持ち得るのは、それが現実の商品交換における商品形態という結果の中に現前する限りにおいてなのである。
- 4) それゆえ、『空間それ自体space as such』が文字どおり内容を欠いた抽象物であるとするならば、かつて幾許かの地理学者が信じたような『空間の科学』はそもそも存在しえない」というSayer(1984, p.133)の指摘は正鵠を得ていると思われる。
- 5) ここでハーヴェイは「不幸にしてわれわれはこの循環の構造の内部を見抜いていない」(Harvey, 1973, p.312)と述べているが、ここでの剰余価値循環への着目が後の「資本循環の3つの回路」(Harvey, 1985)と、とりわけ第2次循環における「建造環境論」(Harvey, 1982)へと発展したことは周知の通りである。
- 6) こうしたハーヴェイやカステルの近年の理論的な変化については、高橋(1993)や岩永(1993)によって詳しく紹介されている。
- 7) 「階級分割社会class-divided society」とは資本主義社会における階級社会とは異なり、「階級が存在し、階級関係が利害の対立という意味でのコンフリクト関係にいつもなっているが、階級分析が制度的秩序を解

- 明する重要な鍵とはならない社会」(ギデンズ, 1989, p.178)を意味しており, 具体的には封建社会における階級社会を想定している。
- 8) ギデンズ自身, このような「不在」と「現前(共-在)」によって構成されるプロブレマティクを「構造化理論」としての枢要的関心」と位置付けている(Giddens, 1984, p.142)。
- 9) それに対してグレゴリーは, ギデンズの時間-空間に対する抽象的命題を歴史学および地理学における特殊性についての詳細な研究と結び付けるためのメソレベルの諸概念の必要性を主張している(Gregory, 1989, p.214)。
- 10) ソジャは「空間space」というタームが, 社会的コンテキストや社会的行為の外部に位置する社会の容器containerという典型的な物理的・幾何学的イメージを想起させることから, それに代わって社会的に生産され組織された空間を特定するのに「空間性spatiality」というタームを用いている(Soja, 1989, p.80)。
- 11) プーランツァスの空間論については, 拙稿(中島, 1993)において簡単にその概略を紹介しておいたので, そちらを参照されたい。
- 12) それゆえレヴィナスが主体にとっての根本的な他者性として「死」と「エロス」とをとりあげたこと(Levinas, 1991)は, それらがまさに他人と共有し得ない自己の身体性にかかわる出来事だからに他ならない。
- 13) レヴィナスは, 絵画による物質性の再現のうちに, 実詞の範疇を一切受け付けない裸形の世界の出現-レヴィナスはそれを異郷性exotismeと呼ぶ-を見出している(Levinas, 1990, pp.83-92)。
- 14) それゆえここでは資本主義システムの経済原理(市場法則)ではない, 経済外的強制や政治的手段によって資本制生産様式と他の生産様式との「接合」が行なわれるのである。

## 文 献

- アルチュセール, L.・バリバル, E. 著, 権 寧・神戸仁彦訳(1974):『資本論を読む』合同出版, 433p.
- Althusser, L. and Balibar, E. (1968): *Lire le capital*. Maspero, Paris.
- 岩永真治(1993): デイヴィッド・ハーヴェイと現代都市-「差異」と「共通性」の内的弁証法をもとめて-。吉原直樹編著:『都市の思想-空間論の再構成にむけて-』青木書店, 247-273.
- カステル, M. 著, 山田 操訳(1984):『都市問題-科学的理論と分析-』恒星社厚生閣, 463p. Castells, M. (1977): *La question urbaine*. Maspero, Paris.
- 柄谷行人(1988):『内省と遊行』講談社, 326p.
- 柄谷行人(1989):『探究 II』講談社, 310p.
- ギデンズ, A. 著, 友枝敏雄ほか訳(1989):『社会理論の最前線』ハーベスト社, 307p.
- Giddens, A. (1979): *Central problems in social theory*. University of California Press, Berkeley and Los Angeles.
- 杉浦芳夫(1986): 計量革命と統計学。野上道男・杉浦芳夫著:『パソコンによる数理地理学演習』古今書院, 187-216.
- 杉浦芳夫(1987): Ackermanとアメリカ地理学の「体制化」-計量革命に関する一考察-。地理学評論, 60A, 323-346.
- 杉浦芳夫(1989a):『立地と空間的行動』古今書院, 207p.
- 杉浦芳夫(1989b): Garrisonとその時代-アメリカ地理学再生の時-。地理学評論, 62A, 323-346.

- 杉浦芳夫 (1991) : Schaeferの「例外主義」論文誕生の顛末に関する一考察. 地理学評論, 64A, 303-326.
- 高橋早苗 (1993) : マニュエル・カステルと「都市的なもの」- 「都市の意味」の変容をめぐって-. 吉原直樹編著 : 『都市の思想-空間論の再構成にむけて-』青木書店, 225-246.
- 中島弘二 (1993) : 地理学と「空間」論. 地理, 38(5), 65-71.
- 吉原直樹編著 (1993) : 『都市の思想-空間論の再構成にむけて-』青木書店, 318p.
- ルフェーブル, H. 著, 今井成美訳 (1974) : 『都市革命』晶文社, 275p. Lefebvre, H. (1970) : *La révolution urbaine*, Gallimard, Paris
- Bunge, W. (1962) : *Theoretical geography*. Lund Studies in Geography, Ser. C, No. 1, CWK Gleerup, Lund, 210p.
- Castells M. (1989) : *The informational city: information technology, economic restructuring and the urban-regional process*. Blackwell, Oxford, 402p.
- Dardel, E. (1952) : *L'homme et la terre: nature de la réalité géographique*. Presses Universitaires de France, Paris, 133p.
- Giddens, A. (1984) : *The constitution of society: outline of the theory of structuration*. Polity Press, Cambridge, 402p.
- Gould, P. R. (1985) : *The geographer at work*. Routledge & Kegan Paul, London, 351p.
- Gregory, D. (1989) : Presences and absences: time-space relations and structuration theory. Held, D. and Thompson, J. B. eds : *Social theory of modern societies : Anthony Giddens and his critics*. Cambridge University Press, Cambridge, 185-214.
- Hägerstrand, T. (1984) : Presence and absence: a look at conceptual choices and bodily necessities. *Regional Studies*, 18, 373-380.
- Harvey, D. (1973) : *Social justice and the city*. Basil Blackwell, Oxford, 336p. ハーヴェイ, D. 著, 竹内啓一・松本正美訳 (1980) : 『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ, 438p.
- Harvey, D. (1982) : *The limits to capital*. Basil Blackwell, Oxford, 478p. ハーヴェイ, D. 著, 松石勝彦・水岡不二雄ほか訳 (1989, 1990) : 『空間編成の経済理論-資本の限界-上・下』大明堂, 686p.
- Harvey, D. (1985) : *The urbanization of capital: studies in the history and theory of capitalist urbanization*. The Johns Hopkins Univ. Press and Basil Blackwell, Baltimore and Oxford, 239p. ハーヴェイ, D. 著, 水岡不二雄監訳 (1991) : 『都市の資本論-都市空間形成の歴史と理論-』青木書店, 328p.
- Harvey, D. (1989) : *The condition of postmodernity: an enquiry into the origins of cultural changes*. Basil Blackwell, Oxford, 378p.
- Lefebvre, H., translated by Nicholson-Smith, D. (1991) : *The production of space*. Basil Blackwell, Oxford and Cambridge, 454p.
- Levinas, E. (1990) : *De l'existence à l'existant*. Librairie Philosophique J. Vrin, Paris, 174p. レヴィナス, E. 著, 西谷 修訳 (1987) : 『実存から実存者へ』朝日出版社, 212p.
- Levinas, E. (1991) : *Le temps et l'autre*. Presses Universitaires de France, Paris, 92p. レヴィナス, E. 著, 原田佳彦訳 (1986) : 『時間と他者』法政大学出版局, 135p.
- Poulantzas, N. (1978) : *L'État, le pouvoir, le socialisme*. Presses Universitaires de France, Paris, 300p. プーランツァス, N. 著, 田中正人・柳内隆訳 (1984) : 『国家・権力・社会主義』ユニテ, 312p.
- Sayer, A. (1984) : *Method in social science : a realist approach*. Hutchinson, London, 271p.
- Sayer, A. (1985) : The difference that space makes. in Gregory, D. and Urry, J. eds. : *Social relations*

*and spatial structures*. St.Martin's Press, New York, 49-66.

Schaefer, F.K. (1953) : Exceptionalism in geography : a methodological examination. *Ann. Assoc. Amer. Geogr.*, 43, 226-249.

Soja, E. (1989) : *Postmodern geographies: the reassertion of space in critical social theory*. Verso, London and New York, 266p.

## The Ontology of Space :Geography of 'the Unspeakable'

Koji NAKASHIMA

### Abstract

As Sayer(1985) notes, concepts of space in the studies of human geography, despite their vast diversity, have varied between two contrastive poles of recognition. One is an absolute concept of space, 'spatial fetishism', in which space is seen as an objective entity which is independent of its constituent objects and has its own ontological autonomy. The other is a relative concept of space in which spatial relation is just a reflection of objects which constitute it and is ultimately reducible to them.

In this paper, we examine the former 'spatial fetishism' in the case of 'theoretical and quantitative geography', and the latter in the case of marxist urban studies on 'urbanism'. Through such examination, it is disclosed that spatial relation involves an ambiguous nature, that space can neither exist independent of constituent objects nor can reduce to them. As Soja(1989) points out, the structure of organized space is not a separate structure with its own autonomous laws of construction and transformation, nor is it simply an expression of the class structure emerging from social relations of production.

Then we discuss an implication of such spatial relation in recent social theory, especially 'structuration theory' of Giddens. He stresses 'time-space constitution of social life' as material channel which connect an agency to the social structure(Giddens, 1979, 1984). The continuity of everyday life depends on time-space routinizing of interaction between people who are *co-present* in time and space. But the development of modern capitalism depends on time-space stretching in global communication which enables to connect capital and labor which are *absent* in time and space. In other words, the history of modern capitalism is a process of time-space integration based on the dialectic between presence and absence.

And such re-formulation of social theory implicates a problematic which situates 'space', not only into recognition of space, but into a point of contact between social theory and ontology. So, in the last chapter, we attempt to tackle the 'ontology of space' on the track of ontology of Levinas(1990, 1991).